

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

王姝

【所属】(助成決定時)

早稲田大学文学研究科美術史学コース博士後期課程

【研究題目】

東魏北斉における半跏思惟像の信仰と表現形式—朝鮮半島・日本への伝播と変容をめぐって

【研究の目的】(400字程度)

本研究では、仏教初伝期の東アジアにおいて最も多く作られた仏像の一つである半跏思惟像の流行と、地域間における認識の変容や信仰のあり様を明らかにする。半跏思惟像は中国の東魏北斉時代、特に都である鄴城（現河北省邯鄲市臨漳県）を中心に極めて盛んに造像された。北魏分裂後に北方東部を占拠した東魏（534～550）と北斉（550～577）は、東アジアの仏教美術において重要な時代である。この時代には、新たな仏教思想や信仰が生み出されただけでなく、新たな造像の動向も見られる。そしてこれは隋唐時代の仏教思想、仏教造像の根源の一つとなって、朝鮮半島また日本に大きな影響を与えたと考えられる。

しかし日本では、飛鳥時代の仏像の様式の淵源を求めて中国・南北朝時代の美術が注目を集めてきたが、東・西魏、北斉・北周時代については、なおざりにされてきた。そして東魏北斉の半跏思惟像は朝鮮半島・日本まで広く伝播し、仏教美術史及び仏教学においても重要なテーマである一方で、研究は十分に尽くされていない。

そのため、本研究では、東魏北斉時代をはじめとして、東アジアにおいて六世紀から広く流行した半跏思惟像の流行の要因と、隣国への伝播の過程における変容に関して論ずる。本研究は図像や形式に対する探求に留まらず、信仰や受容のあり方にも言及し、多角的な視点から半跏思惟像を捉える。さらに本研究は、東アジア諸国の間に介在する仏教信仰観念の相互理解に繋がり、地域間の文化伝播の一端を紐解く鍵となり得る。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、作例の現地調査に基づき、史書と仏典を活用しながら作例の研究を行う。

現地調査は主として中国の南北朝時代の遺存をめぐり、中国遼寧省義県、山東省青州、江蘇省南京、さらに東魏北斉の中心地河北省、河南省で調査を行った。

次に、歴史文献に記録された東魏北斉、または中国南北朝時代の仏教諸様相を整理分析した上で、日本の飛鳥時代の仏教受容、信仰に関連文献を整理した。本研究は南北朝時代の国史や仏教史籍、雑記など各種の資料を確認する上で、半跏思惟像の流行原因はおそらく、当時の東魏北斉の都である鄴城で行った釈迦太子の出家を記念する行城儀式と関わり、行城儀式では半跏思惟像を主役の像として使ったと推測できた。さらに半跏思惟像の流行も、鄴城で最も力をもつ仏教学派、地論宗と関係することを明らかにした。

そして、東魏北斉の名僧あるいは上層貴族に深く関連する仏教造像及び中小型石窟の造営、様式、銘文、刻経を実地で調査し、南北朝時代の造像状況を把握した。先行研究として李静傑氏の『定州白石仏像』は、多くの東魏北斉の白石仏像の基本情報をまとめ、また倉本尚徳氏の『北朝仏教造像銘研究』は北朝の造像銘を記録し、銘文から当時の仏教観念及び信仰について論じた。両氏はすでに非常に多くの作例を整理したが、半跏思惟像を中心にする研究はまだ不十分である。本研究は両氏の研究を踏まえ、東魏北斉の仏伝造像は明らかに前

代と異なる傾向を示し、釈迦太子の「出家」に関わる仏像を多く造営することを発見した。そして半跏思惟像が最も出家の説話を反映する像として見られることを指摘した。また、河南省の北斉天統三年（567）韓永義造像碑の「八相成道、似同凡夫」という銘文から、当時の造像活動と仏教教学が結びつく部分を発見し、半跏思惟像の流行は当時の仏身観、救済に対する認識に関わると確認できた。その救済に対する渴望の根源は、今の時世の衆生は救えられる機会が渺茫な末法時代であるという認識と緊密な関係にあると考えられ、行城儀式が生み出された重要な原因とも考えられる。

【結論・考察】（400字程度）

本研究では、東魏北斉の仏伝造像において、前代と比較すると「出家」に関する一連のエピソードをめぐって作られた像が主流になったことを論じた。その中でも、俗人から菩薩への転換、仏果を証することの開始と、後の成道を果たすことまでも内包する半跏思惟像は、最も「出家」の説話を反映する像として多く造営されたことを明らかにした。

そして、このような半跏思惟像が流行した一つの理由として、大乘仏教の「菩薩」に対する思想・信仰が深く関わっている。東魏北斉時代で最も影響力がある仏教学派地論宗から生み出された「八相成道」という思想の下で、半跏思惟像は、出家を決意して修行の道に歩き出すことを表し、救済の象徴でもある。大乘仏教の菩薩は悟りを目指して修行し、そして利他行を実践して人々を救う。ここでの半跏思惟像は、釈迦でもあり、一切衆生を済度するために思惟する菩薩でもある。つまり、半跏思惟像は、衆生を苦しみから救い出せる象徴であり、人々の救済のために尽くす菩薩の原点でもある。

また、東魏北斉では二月八日が、釈迦太子の踰城出家の日とされ、その日に行城儀式を行ったと論じた。行城は太子の出家によって仏法がこの世界に流伝し、衆生が救済を得られることを讃える儀であると考えられる。そのため、太子の出家を最も反映する像である半跏思惟像が行城儀式の中心として使われたと想定できる。つまり、東魏北斉における半跏思惟像が流行したのは、行城儀式の出現も根源になると想定できる。

そしてこのような半跏思惟像が朝鮮半島・日本へ伝播した時期も、戦火が飛び散る三国時代や仏教の初伝期である飛鳥時代である。このような背景のもと、半跏思惟像は苦しむ衆生に救済を与える無限の慈悲を持つ菩薩として、貴族から庶民に至るまで広く崇拝されたと考えられる。